

勿凝学問 198

僕の需要はコンサル需要だな

2008年11月15日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

昨日の朝6時半から8時半まで東京青年医会主催の早朝勉強会。質疑応答も終えた勉強会の終了後、以前、僕のホームページを読み込んでますと自己紹介をされたことのある人がいた方向から、「やっぱりナマがいい」との声が聞こえる。

うん？ 文章で勝負をしているつもり僕としては、聞き捨てならぬことばではないかい。文章よりも、話の方が分かりやすい、面白いというのかい？

他にも、「普通は、これだけキッパリと間違えている人に間違えていると話をされると、陰悪なムードになったりするんですけど、先生が話されると、ぜんぜんそんなことないですね。やっぱりお人柄でしょうか？」と初対面の挨拶もされる。

うん？ なにかい？ 僕は論理で勝負をしているつまりなのだが、実は、キャラクター勝負の仕事をしているとでもいいたのかい？

でもまあ、思いっきり左に位置する組織主催のシンポジウムに呼ばれるときに、「"アウェー"かもしれませんが、どうぞ遠慮なく、ご発言下さい。先生のお人柄は、少々きついことを言っても、十分カバーできると思います」との連絡がくるくらいなのだから、おそらく文章や論理だけではなく、キャラクターも加味されている側面があるのは否めないのだろう——研究者としては極めて残念な話なのであるが(T_T)ト林ッ

ところで最近、まわりがおそろしく納得してくれる話がある。その話とは・・・

僕には、右から左まで党派に関わりなく呼ばれるという特技があるようなんですね。どうも最近感じるのは、彼ら組織の責任者たちは、僕の言っている方向でやっていくしかないかと分かってきている、否、諦めてきている(?)模様。しかし車は急に止まれないではないが、いきなり組織の方向転換するのはいつの時代も至難の技。彼らの悩みは、攘夷を煽っておきながら攘夷は無理だといち早く覚った人たちに似たものがあるんですね。駅前でビラを配り、街宣カーで運動していた人たちに、これまでの方針を指示していたのは彼らの組織そのものだったのだから。組織の内部改革は本当に難しいようで、そこで、相手が誰であろうが明るく批判する僕の需要が生まれている模様。要するに、僕の需要はコンサル需要なんですよ。

この話を聞いた人はみんな、なるほどおと手を打って納得してくれるわけである。

この国が方向転換できるのか、社会保障国民会議で示された政策転換を実際に実行できるのか——それは、これまで、冗談だよねと言いたくなるような財源調達論を主張しつづけてきたいろんな組織の改革可能性に依存しているように見えるのだけど、やっぱりそれが一番難しいのかもしれない気がしないでもない。みなさん、ふぁいとです。歴史的に見れば、革命は終盤に入ったと言うこともできますけど、この時期からが最も危ない時期でもあると言うこともできる。。。